

# ハイデガーにおける「共存在」の研究 ——「学」、「死」そして「われわれ」——

くろおか よしまさ

黒岡 佳柁

本稿の主な目的は、マルティン・ハイデガーの 1920～1930 年代における哲学を、現存在の本質的な規定である「共存在 Mitsein」という概念に基づいて照射することで、ハイデガーが主張する本来的に他者と共に存在するという事態の内実を解明することにある。そして、この目的のために、本稿では二つの観点を導入する。

第一の観点は、「哲学」および「学」である。従来のハイデガー研究では、ハイデガーの「共存在」は、政治的な文脈のなかに位置付けられることが多い。しかし本稿は、政治的な解釈では見落とされている「哲学」と「学」との連動性という学的動向のなかに「共存在」を位置付けることで、ハイデガーが目指した本来の「共存在」を学的「共存在」として提示する。

第二の観点は、「死」である。ハイデガーの本来の「共存在」の議論では、「死」の位置づけが不明瞭であるという問題がある。この問題の内実を提示しつつ、現代フランスの哲学者であるジャン＝リュック・ナンシーや、アメリカの哲学者であるアルフォンソ・リンギスによる「死」と「共同体」の議論を導入することで、ハイデガーの「死」と「共存在」における問題点を、批判的に考察する。

こうした成果を通じて、本稿の最終的な帰着点は、「死」が、「共存在」としての「われわれ」を思考する際の重要課題であり、かつまた現代的な課題であることを提示することにある。

以上から、本稿は以下のように構成されている。

第 1 部では、本来の「共存在」を「学的現存在」として解釈しつつ、『存在と時間』を読解する。

第 2 部では、ハイデガーの「大学改革」の内実を明らかにし、そこでの「共存在」の在り方を「共に哲学する者」として明らかにする。

第 3 部では、ハイデガーの本来の「われわれ」の議論に基づいて、ハイデガーにおける「私の死」と「共存在」の問題の内実を明らかにし、ナンシー、リンギスの議論と比較考察を行う。

# Study of “Mitsein” in Heidegger —“Science”, “Death” and “We”—

くろおか よしまさ

KUROOKA Yoshimasa

The main object of this essay is reconsidering Martin Heidegger’s philosophy in 1920s-1930s in accordance with the concept of “Mitsein(Being-with)” and clarifying the meaning of authentic-being-with-others in Heidegger. And, for that purpose, this essay will introduce two standpoints.

First standpoint is “Philosophy” and “Science”. This essay aims at evaluating “Mitsein” in the context of scientific reform by philosophy and showing Heidegger’s “Mitsein” as philosophical relationship with others.

Second standpoint is “Death”. In Heidegger’s insists about the authentic “Mitsein”, it is not clear how my death, which is inevitable moment of authentic Dasein and “Mitsein”, connects genuine association with others. So, introducing thought by Jean=Luc Nancy and Alphonso Lingis about death and community into argument, we will examine critical the relationship between “Death” and “Mitsein” by Heidegger.

Then, this essay is composed of 3 parts as follow.

Part 1 treats “*Being and Time*” and tries to consider authentic “Mitsein” as scientific being-with-others.

Part 2 clarifies Heidegger’s plan of reform of university and finds community composed of co-philosopher in its plan.

Part 3 puts the question of relationship between “Death” and “Mitsein” as “We”.